説教20210425使徒4：32-37 ヨハネ10：7-16

「命を豊かに受けるため」 Ⅱ41　21-331　153

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

二週間ほど前、温泉での出来事ですが、80がらみの左官屋をしていた職人さんがしゃべっていました。

昔は忙しかったよ、時には日田まで行って仕事をしていた。という具合に昔話をしたあとに、彼は、「便利になるのも良し悪しだねえ」と言いました。今は、建屋の内側も外側もボード貼り付け工法にとってかわられて、左官屋の仕事はほとんどなくなったというのです。彼は、自分の成してきた仕事を今、振り返って、良いことだったとしみじみ思っています。だから、便利にはなったが、左官屋の仕事がすっかりなくなってしまった現状を嘆いているのです。

彼は、あちこちの現場に行って左官屋の仕事をしている現役のときは、自分の仕事が良いとか悪いとかいったことは考えもしなかったのではないでしょうか。左官屋というのは建物の壁や床、土塀などを、こてを使って塗り仕上げる仕事をする人たちであります。この仕事を生涯の仕事としてやり遂げるには、日々、「今日は良い仕上がりだった」とか「今日はダメだった」とかいう吟味はあったにせよ、自分が良いか悪いかなどとは思いもしなかったのではないでしょうか。彼はそんなことはお構いなくその仕事を生涯にわたって続けたので、全ての仕事を終えたあとで、やっとこさ、あー良かったという言葉が与えられたのだと思います。

彼の、良かった、という言葉はこのように重みのあるものですが、聖書に出てくる良い、という言葉も大変、重いものです。創世記1章4節の「神は光を見て、良しとされた」その時の、よいという言葉は、大変重い言葉で、その通り光はよいものとされたのです。

それに比べて、今の世で連発される、良いね、という言葉はますます軽くなって来ているようです。イエス様はある青年が走り寄ってきて、「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」と尋ねた時、「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。」と言い返しました。これは、良いと言う言葉を軽々しく用いることを戒める御言葉とも受け取れるでしょう。

さて、現代人は、良いという言葉を使いたくてうずうずしているかのようです。それだけ、まことに価値ある良いものが少なくなってしまった証かもしれません。今日、読まれました使徒言行録の聖書箇所も、良いことが書いてありますので、これを読んだ私達は、たちまち良いね、を連発するかも知れません。実は、今から、６０年程ほど前にも、そんな時代がありました。そのころ、クリスチャンと共産主義者の間には共感しあう者も多くいて、この使徒言行録の聖書箇所は、まさに共産主義思想をうたっているとして、良いねを連発していたのです。しかし、そのように安易に良いねと評価すると、あとになってから、後味が悪いと言いますか、後悔してしまうようなことになるのがオチであることが多いでしょう。

今日は、よい、という言葉のもつ重みに留意しながら御言葉に聞いてまいりたいと願います。今日のヨハネ福音書の聖書箇所は、たとえ話です。全体的にはこの囲われた牧草地は教会をあらわしていることでしょう。そしてイエス様は、出入りするための門、そして羊飼い、そして羊じたいにも譬えられています。では、私達人間は何に譬えられているかと言いますと、それは羊であり、又人によっては羊飼いで在り、そして狼でもあることでしょう。この牧草地には、羊もいれば羊飼いもいれば、狼もいるのです。このようなメンバーが囲われて一つ所にいれば、いかにもいろいろなゴタゴタが起こるべくして起こりそうですが、まさにイエス様はそのような場所として教会を譬えておられるのでしょう。そして教会にいるこのように雑多な人々は、一人のよい羊飼いであるイエス様に導かれて一つの群れとされるのです。

さて、よい羊飼いと、イエス様はおっしゃいます。実は、このよいという言葉は、大変重いものです。そして、実際にこの時代には、よいと形容できるような生き様をした羊飼いが多くいたのです。そのよい羊飼いの一端を、ある註解書によってご紹介したいと思います。「羊飼いは大声で羊に何かを問いかけたが、その言葉はまるで、牧神がギリシャの山々でこだまさせた、あの笛の音のようであった。それは人間の物とも思われず、何か不気味な感じの、動物的な叫びであった。羊飼いが語り終わるか終わらないうちに、羊たちは群れをなしてメーと振るえるような声を返した。そして1，2頭が頭をあげて羊飼いを見た。しかし羊たちは羊飼いに従わなかった。すると、羊飼いは一つ合図して、笑い声のような鳴き声をあげた。そのとたん、首に鈴を付けた一匹の羊が草をはむのをやめ、群れを離れて丘を駆け下り、谷をよぎって反対側の斜面を登り始めた。羊飼いはその一匹を追っていき、群れからはその姿が見えなくなってしまった。そうすると、群れは不安になり狼狽し始め、草をはむことをわすれた。姿が見えない羊飼いを求めるその羊の群れは、遠くから羊飼いの笑うような叫び声を聞きつけるやいなや、その声のほうに向かって、群れ全体がどっと窪地に殺到し、そして羊飼いに従って丘を駆け登っていった。」

如何でしょうか、イエス様はこのような仕事をしている羊飼いたちを「よい羊飼い」であると言われました。この羊飼いは、このように羊たちを心にかけ、又羊たちも羊飼いの声を聞き分ける生活をしていたのでした。このような羊たちとの交わりの仕事が日常となっていた彼の仕事は本当に恵まれた者であったことでしょう。羊飼い自身は、自分のことを良いとも悪いとも思っていなかったことでしょう。なぜなら、わざわざ良いね良いねと確認するまでもなく、それは良い者であったからです。イエス様は自分は、このようなよい羊飼いであると言われました。この時代の人々は実際によい羊飼いの一人や二人を知っていたでしょうから、イエス様は、良い羊飼いである、と聞いたときに、それはどんなことなのかを具体的に思い描くことが出来たのでしょう。現代に生きる私達は、このような羊飼いたちのような満ち足りた生活をなかなか体験できないでいます。ですから、羊飼いが羊のことを心にかけて、そして羊が羊飼いの声を聞き分けることの出来る、よさから遠ざかっています。ですから、私達は今日の聖書箇所を読むとき、そこにあるリアリティーを感じないままに、「わたしは羊のために命を捨てる」といった御言葉を、教訓のように受け止めることが多いのではないでしょうか。しかし、この時、イエス様のこのたとえ話を聞いた人たちは、先ほどお話ししたよい羊飼いの有様を、その目で見ていたので、羊飼いが羊の為に命を捨てることもあるだろう、というようにこのたとえ話が腑に落ちたのだとおもいます。

では現代人は、何に譬えられるでしょうか。それは、雇い人としての羊飼いでありましょう。何かに怯え、羊を置き去りにして逃げ惑うその姿は、今の私達にとって、残念ながら大変分かり安く、腑に落ちる譬えであります。私達はよい羊飼いの充実を知らないゆえに、羊の為に命を捨てることが恐怖なのです。

そんな私達の救いはやはりイエス様です。私達は自分の命を失うのを恐れて、囲いの外側に逃げ去ったりします。しかし、その囲いの外には、イエス様から受ける豊かな命はないのです。イエス様は、雇い人である羊飼いのことを、悪いと言って非難されてはおられません。ただ、囲いの外に逃げていってしまう私達を憐れんでいるかのようです。囲いの外に逃げ出した私達をイエス様は、導かなければならない、と言われ、決して、心に掛けることをやめられてはいないのです。

私達のさらなる救いは、イエス様は出入りできる門であるという事です。私達が囲われたこの牧草地の中に、門をくぐって戻って来ることを今か今かと待ち望んでおられます。

それにしましても、この門の出入りの緩さというのは一体何なのでしょうか。そしてこの牧草地を囲む囲いの低さとというのは一体何なのでしょうか。私達のよくある発想は、囲いを厳重に高くして、狼の一匹もそのなかに入れさせない。という者でしょう。厳重に門番をおいてその出入りを統制するというのが、人間のよくするやり方であります。しかし、イエス様のやり方はそれとは正反対です。

私達は、そんなイエス様に感謝と賛美を捧げていきたいと思います。私達は、よい羊飼いになろうとしてもなれないでいる者たちです。そして、囲いの外に自ら逃げ出してしまう者たちです。。しかしイエス様はそんな私達がかえって来ることを門を開いて待っておられるのです。

又、私達は盗んだり屠ったり、屠ったりする者にもなりかねない者です。そういうものをもイエス様はこの牧草地から完全に排除されようとはしません。それがなぜなのかははかり知ることは出来ませんが、ともかくも、イエス様は、このようにして私達を一つの群れにされようとしているのです。イエス様が成し遂げようとされています、一つの群れは、人間が作り出す排他的な集団とは似てもにつかない者でありましょう。私達は、もともと何がよいことで何が悪い事かを判断出来る立場にはないのかも知れません。私達に出来ることは、イエス様をよく知り、イエスさまから、よい羊飼いよ、と言われることでしょう。

　そして、私達は教会の体、イエス様の一部分であります。そのことを今日の聖書箇所に即して譬えるならば、イエス様は門であり、私達はそれに連なる囲い、生垣であるということでしょう。私達は、よい羊飼いになろうとしてなれずに行きづまるとき、イエス様は門、私達はそれに連なっていく生垣と口ずさみながら、手を携えて教会を守っていくものとされていきたいと願います。

、

お祈りいたします

天の父

私達はあなたによって自由なものとして造られながら、自分一人の頑なな心によって滅びてしまう者です。どうかそのような私達の向きを変え、御子の招きに応える自由な心をお与えください。

そして、御子を信じ御子に従い、その養いの囲いの中で憩うものとならしめてください。私達があなたから外れてしまう臆病な心を励まし、あなたが定められた囲いを守る者にして下さい。

東京、大阪、京都、兵庫の4都府県で今日から緊急事態宣言が発令されました。当地で礼拝を守られる方々を覚えます。教会にある方々が、あなたの祝福の内に守られ、どんな時にも御言葉によって養われますように。

私達が天変地異に心惑わされることなく、聖書の御言葉に立ち返り、この地を歩む一歩一歩が守られていきますように。

父と聖霊と共に一体であって